

日本人とすまい

上田 篤著

岩波書店 新書版 216頁

230円

住居は、人にとって単なる「寝ぐら」ではない。「健康で文化的な生活」を営むため安心して住める生活の本拠でなくてはならない——7月20日、東京都住宅対策審議会は都知事に対し、「大都市における住宅のあり方」について答申したが、そのなかで住宅の意義を、こう位置づけている。当然といえば当然だが、現実はどうか。果たして、人が利用するような立場から建てられているだろうか。

日本のすまいとそのすまいに対する私たちの姿勢に対し、「物質的に合理主義的な立場」が欠けていると考える著者は、その点を発生論や比較論の視点を加えながら具体的に指摘している。

日本は四季をとわず、雨が多い。したがって、これまでの日本の建物には、傾斜のついた屋根があった。しかし、「現代の建築をみると、ビルでもアパートでも、新しいものには屋根がない。鉄筋コンクリートづくりのテラス・ハウスや、モダンリビングなどでも、ことさらに屋根は除却されている」。

「ところが、近代化＝洋風化とかがえられるその本家のヨーロッパへいってみると、新しいアパートなどにも、いぜんとして屋根のついているケースが多い」のはなぜか。「フラット〈水平〉の屋根よりは、傾斜のついた屋根のほうが、水はけがよいにきまっている。屋根が破損したときも、かわら屋根だと部分的補修ですむ」からだ。

そのような「近代化」の傾向は、屋根だけではな

い。柱、戸、窓なども、日本の風土で生まれた特色を失いつつあると警告しているのである。

こうみえてくると、いまの日本のすまいは、著者のいうように「伝統と近代化のあいだにはさまって文字どおり戸まどっているようである」。では、なぜ、日本の風土から生まれてきた特色を生かそうとせず、「近代化」のマネだけしようとするのか。日本人の心のなかに、すまいの理念がないからだと、24の評論のなかで指摘しているように読みとれる。

さて、私たちは道路局職員、計画局職員あるいは建築局職員などとして働いている。しかし、その仕事ぶりはどうか。公園や道路などをつくる場合そのもの自体を目的としていないだろうか。つまり、人の利用を考えずに、つくること自体が目的となっているのでは、という疑いである。本書におけるすまいを、仕事と置きかえ、「仕事とは何か」を追い求めることも、あながち無駄ではないと思う。

〈市民局相談部広報課 砂川忠雄〉

あとがき

横浜での建設関係の仕事の7割近くは、おもに東北農村からくる季節労働者の人たちに担われている。全国で60万人、市内だけで4～5万人にもなるこの人たちは、1年のうち、3カ月から6カ月以上も家族と離れて暮しており、故郷に残された妻や子の犠牲も多い。横浜での生活の実態は、あじけない仮設プレハブと建設現場の生活に象徴されるが、半数の人たちは「農業収入だけでは生活ができないから」と答えている。今回は、都市建設の裏側で進む農村社会の崩壊を“出稼ぎ労働の問題点”というテーマで特集を組んでみました。

〈岡村〉

調査季報

43

1974年9月30日

編集・発行——横浜市企画調整局都市科学研究室

横浜市中区港町1—1

印刷——西岡印刷株式会社

横浜市南区吉野町5—22

1974年9月30日発行 1冊 100頁 100円